僕の彼女はクーデレAV女優

★シーン1

●クーデレのデレてる感じ。

●ちょっと中二病を引きずった大仰な物言い

「んっ…あぁ、君だったのか。

急にチャイムが鳴ったから、誰かと思ったよ。

連絡もなしに、突然どうしたんだい。

それに…くすっ、かなり慌てた様子じゃないか。

あぁ…なるほど、そうか。

もう一週間以上、君のそばから離れていたから、心配してくれたのか。

君は本当に優しい男の子だね。ありがとう。私は大丈夫だよ。

…それに、予め、君と会えない理由も伝えていたはずだろう？

撮影やら、新しい作品の発売記念イベントやらで、忙しくなってしまうと。

…ん？　何の撮影か、って…？

くすっ…あぁ、あえて私に言ってほしいのか。

相変わらず…優しいくせに、どうしようもない変態くんだな。」

●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。

「私は…君の彼女でありながら、AV女優、なんだ。

そう。色々な男の人とセックスをすることが仕事の…どすけべ女なんだ。

お陰様で注目されるようになってきてね…。

最近は、月に一本ペースで新作を発売している。

だから、撮影の仕事も頻繁に入っているし…。

私をオカズにしているファン達との交流も、定期的に行っているんだ。

ずっと君のそばにいてあげられるほど…暇な女じゃないんだよ。くすっ。」

●ここまで囁き

●突き放す感じではなく、ニヤニヤ揶揄う感じで

「これで満足かい？

人気AV女優を彼女としてはべらせている、変態男子くん。

んぅ…？

首を横に振っているな。まだ何か足りないとでも…？

くすっ…あぁ、そうか。本来の目的は…そっちだったのか。

君の鞄に入っているそれ、私が出演しているAVだろう。

くすくす。そうか。また…あれをやってほしいんだな…？」

●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
「出演しているAV女優本人による、ねっとり濃厚解説…♡
君だけの女であるはずの私が…♡
他の男に犯されている、合法エロビデオを一緒に見て…♡
この時はこんな匂いがしただとか、どこが気持ち良かっただとか…♡
教えてほしいんだろう…?♡
二人きりの部屋で、ぎゅうっと密着しながら…♡
私の、この声で…♡　耳元で囁いてほしいんだろう…?♡　くすっ♡」
●ここまで囁き

●ニヤニヤ揶揄いモード継続
「…そんなに委縮することはないよ。いつもの事じゃないか。
そもそも、AV女優の私と付き合っている時点で、君の性癖はお見通しだよ。
だから、何ら恥ずかしがることはない。
さあ…いくつか持ってきているみたいだけど…
まずはどれから見たいんだい――?

へえ…それか…♡
タイトルはぁ…♡
「極上美少女貸し出します
　今話題のクール巨乳女優、秋元凛が童貞オタク君の精液を搾り取っちゃいます♡」
だな…♡

少し前に発売したものだね。くすっ、懐かしいよ。
たしか君は以前、男優はともかく、他の素人に抱かれているのは見たくないと言っていたはずだが…。
…そうなんだ、ようやく見たいと思ってくれたのか。
…克服、したのかい。
くすっ、偉いじゃないか。

それなら早速、一緒に見ようか。
ディスクを…パソコンにセットして…と…。
ほら、始まるよ。
私の声に集中しながら…視聴してくれ。

…まず最初は、今回の相手である、童貞君とのご挨拶シーンだ。」

●ニヤニヤ揶揄いモード継続
「質素な見た目の部屋だろう。
これでも一応、街中の普通のラブホテルなんだよ。
私の隣に座っている童貞君だが、この企画に自ら応募してきたという、私のファンだそうだ。
作品内では、私が街中で逆ナンしてきた、という設定になっているが…。
なんというか、そういう設定のほうが販売本数の伸びが良いらしくてな。
あまり深く気にしないでいい。

彼の見た目はどうだい…？
個人的には、君に少し似ていると思ったが…♡
重たい印象を受けるもっさりとした黒髪に、視力矯正の為の眼鏡。
明らかに女性慣れしていなさそうな、やや暗めの冴えない表情。
体型は中肉中背。決して悪くはないが、良くもない…影の薄い男だ。

くすっ…あぁほら、私に近付かれただけで、震えてしまっているな。
自分で応募しておいて、今更怖がっているんだ。いかにも童貞っぽいだろう。
そんな彼だが、視線だけはきっちりと私に向けているんだ…♡
震えて、怯えて、緊張しているのに…。
えっちな視線で、私の身体をべろべろと舐め回しているんだよ…♡

そうだ…いま君の隣にいる、この私の全身を、だよ。
男に興味がなく、性欲が薄そうな、クールぶった顔をしている癖に…♡
身体は、服を着ていても肉感が丸わかりの、巨乳安産型ボディ…♡
形がはっきりと浮き出るほどのGカップおっぱいに…♡
はちきれんばかりにむちむちなお尻、掴み心地抜群の太腿…♡
特に彼は、私の黒髪に夢中になっていたよ…♡
指通りが滑らかで、艶やかなこの黒髪から香る、甘ったるい女の匂いを…♡
べとべとに脂ぎった鼻をひくひくさせて、嗅ぎまくってきたんだ…♡
「ああ、凛ちゃんの髪の毛、いい匂いがするぅ♡」
なんて呟いていたりもしたな…♡

くすっ…そんなところも、君と似ていると感じていたが…。
ふむ…なるほどな、君がこのAVを見たくないと言っていた理由が分かったよ。
同族嫌悪、だろう。
自分と似た容姿の彼に、私が抱かれてしまうのが我慢できなかったんだ。
嫌で嫌で仕方がなくて…けれど、それ以上に見たいと思ってしまった…♡」

●ニヤニヤ揶揄いモード継続
「だからこうして私にお願いをしている…と。
くすっ…全く、可愛いじゃないか…♡

ほら…君が目を逸らしている間に、彼の身体に、私が近付いてしまったぞ。
肌と肌とが微かに触れ合い…互いの吐息の匂いが感じれられる距離。
その上、二人はこれからセックスをすると確定しているのだから…。
きっと彼の心臓は、激しく鼓動を刻んでいたはずだ…♡
ばくん、ばくん、とな…♡

それで私は、彼にこう伝えたんだ。
「キミが本当に童貞かどうか確かめさせてもらう」と…♡
そしたら彼は、俯きながらどうやって確かめるのか、と尋ねてきた。
だから…こうやって、彼に思いっきり抱き付いて…♡
ぷにぷにのおっぱいを押し付けるようにしながら…♡
耳元でこう囁いてやったんだ…♡

●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
「女性と肉体を重ねた経験のある、普通の男、であれば…♡
こうして抱き締められた程度では、勃起などしない…♡
だが…童貞君の場合は違うんだ…♡
押し付けられたGカップの柔らかさに狼狽え…♡
耳をくすぐる官能的な声に、背筋を痺れさせてしまう…♡
憧れのAV女優に密着されただけで…ちんぽを勃起させてしまう♡
そして、金玉から…濃厚な精液を吐き出したくてたまらなくなってしまうんだ♡
どうだい…♡　おちんぽ勃起、してしまったかい…？♡
汗臭い金玉の中で、精液がぐつぐつしちゃっているのかい…？♡
くすっ…♡　隠す必要はない…♡　正直に言っていいんだよ…♡
どちらにせよ、ズボンを脱がして直接確認することになるからな…♡」
●ここまで囁き

●ニヤニヤ揶揄いモード継続
それから私は、彼のベルトを外し、ズボンとパンツを一気に下ろしていったんだ。
ほら…よ～く見ててくれ…♡
童貞チェックの結果が出るぞ…♡

●ニヤニヤ揶揄いモード継続
「…あはっ♡　彼のおちんちん、ぶるん、と勢い良く飛び出しちゃったね。
結果はご覧の通り、がっちがちに勃起してるから…童貞君で間違いなし、だ♡
根本から亀頭まで、あれだけ強張っているのに、皮を被ってしまっていて…♡
あぁ…思い出すだけで下腹部が疼いてしまうよ…♡
汗とチンカスの匂いが混じった、童貞君特有のちんぽ臭、凄まじかったなぁ…♡

くすっ…彼が恥ずかしい部分を見せてくれたのだから、当然、次は私だよ。
視線を合わせながら、「服を脱がせてほしい…♡」なんておねだりしちゃってるな。
童貞君はああいう、女の弱々しい仕草に弱いんだ。
私みたいな、普段は冷ややかで強気な性格の女であると、尚更その効果が強くなる。
だから…ほら…彼、鼻息を激しくしながら…♡
私の服に両手を伸ばしているだろう…♡
汗ばんだ指先で、焦りながらボタンを外して…♡
私の胸を露わにさせてきたんだ…♡

見えるかい…？♡
私の胸を包んでいる下着…♡　紫色のレースブラジャーだ…♡
気品と可愛らしさ、その両方を兼ね備えた、どすけべなブラだよ…♡
実はね…私自身があの下着で出演したいとお願いしたんだ♡
理由は単純さ。
…欲張りな童貞君に喜んでもらえると思ったから、だよ♡

そして私の予想通り、彼は大喜びしてくれてね…♡
「これから女の身体を愛撫する方法を教えてあげる」と伝えたら、何度も頷いていたよ♡
作品の説明上は、童貞オタク君へのセックス指導、とチャプター名が付けられていたはずだな。くすっ…♡

あぁ…俯いちゃだめじゃないか♡
きちんと前を向いて、映像に集中してくれ…♡

ほら…私は、彼の手を握り、胸へと引っ張ってしまったんだ…♡
不意を突かれた彼は、そのまま柔らかいGカップおっぱいを揉んでしまう…♡
汗ばんだ指が、もちもちのおっぱいに沈み込んでいって…♡
ぎゅう、むぎゅう、と…もう勝手に動き始めてしまっているね…♡
彼に胸を揉まれた私は、わざとらしく「あん…♡あん…♡」と喘いでいるのだが…♡」

●ニヤニヤ揶揄いモード継続
「くすくすっ…♡　見てくれよ、彼の満足気な表情を…♡
喘ぎ声が演技である事に気付く余裕がないから、私を気持ち良くできていると勘違いしているんだ…♡

それと…耳を澄ましてみてほしい…♡
彼の、小さな声が聞こえてくるだろ…♡
自信に欠けた、おどおどとした声で…こうやって呟いてるな…♡
「凛ちゃんのおっぱいやわらかっ…♡」
「おっぱいがでかすぎて、どこまでも指が沈み込む…♡」
「あぁすき…♡凛華ちゃんだいすきぃっ…♡」
くすくすっ…♡　どうだい、君の彼女が、他の男に求められている様子は♡
辛くて、苦しいか…?♡　いや、君の場合は違うよな…♡　くすっ♡

●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
「童貞君はな、媚びていると分かる程の、わざとらしい演技を好む傾向にあってね。
だから私は、蕩け切った女の顔を作り、身体を震えさせながら、こうお願いしたんだ…♡
「おっぱい揉むの…上手すぎて…キミとキス、したくなっちゃった…♡」って…♡
●ここまで囁き

●ニヤニヤ揶揄いモード継続
「くすっ…♡　そしたらね、彼ったら、あんな風に…がっついてきて…♡
私の両肩が強く握り締められて、そのまま、ぐっぽりと唇を塞がれてしまったんだ…♡

いや、さすがに抵抗はしたんだよ…?♡
私にとっても、撮影現場にとっても、予想外な行動だったから…♡

ただ、性欲を熱く滾らせた彼を…誰も止めることができなくてね…♡
この映像の通り、AV女優であるはずの私が、童貞君ごときにべろちゅーで責められてしまったんだ…♡」

●ここから囁き有声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
●非キス音。めっちゃゆっくり
ぶちゅぶちゅ…べろべろ…ぶっちゅぅ…♡

●無声音囁き。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
「目を凝らして…よく見てくれ…♡
彼の汚らしい舌で、口の中を掻き回されてしまっている私を…♡
童貞君特有の乱暴さに翻弄され、ねばねばの涎に溺れて、苦しそうにしている私を…♡」

●有声音囁き合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
●非キス音。めっちゃゆっくり
「べろべろ、じゅるじゅる、ぶちゅぶちゅ…♡」

●無声音囁き。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
「彼とのキス…えろすぎるだろう…♡　くすっ♡」
●ここまで囁き

●ニヤニヤ揶揄いモード継続
そうやって、主導権を握られそうになった私は、どこか焦るように台本通りに進めていったんだ。
女の身体の愛撫の方法を教えてあげる…そのコンセプトはまだ継続中でね。
だからほら…ショーツを脱いでスカートを捲り上げて…あそこを見せつけているだろう。
んっ…？　あ、あぁ…分かった、きちんと言うから…♡
おまんこ…だよ…♡　おまんこを、彼に見せつけたんだ…♡
おっぱいの揉み方、キスのやり方…そして次は、おまんこの舐め方。
これから童貞を捨てるおまんこがどんなものなのか、じっくりと確かめてもらったんだよ♡」

【●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。】
「ちゃんと見ているか…？♡
彼の顔が…段々と…私のおまんこに近付いているね…♡
あんなに至近距離で見詰められたら、さすがに恥ずかしくなってしまうから…♡
どうしても愛液が溢れてしまうし、おまんこの入り口もヒクついてしまっていたと思う…♡

それで私は、「おまんこを舐めてほしい…♡クンニしてほしい…♡」と彼にねだったんだ♡
物分かりの良い彼は、すぐに頷いてくれたよ。
そして、おまんこを…舐め始めたんだ…♡
あぁ…君が見ている通り…それはもう、大胆な食らい付き方でね…♡
新鮮なスイカに豪快にしゃぶりつくような、そんな勢いだろう…？♡

●無声音囁き。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
「おまんこの入り口にぶっちゅぅ、ぶっちゅぅ、と吸い付いて…♡
時々、愛情を注ぐように周りを舐め上げたり…♡
おまんこの中に勝手に舌を入れてきたり…♡
手当たり次第に吸い付いてくるから、直接的な快感は少なかったんだが…♡
童貞である彼の必死さに、私の母性がくすぐられてな…♡
胸と、下腹部の辺りが、こう、きゅーっと締め付けられて…♡
思わず、軽くイってしまったよ…♡

彼にまた…主導権を握られてしまいそうになっていたんだ…♡」
【●ここまで囁き】

●ニヤニヤ揶揄いモード継続
「くすっ…なんだ、落ち込んでいるのかい。
大切な彼女が、童貞ごときにイかされてしまって、悔しいのか…?♡
でも安心してほしい。私だってAV女優としてのプライドがある。
童貞にイかされて…反撃せずに黙っているほど、真面目じゃないよ。
私のためにも、君のためにも、たっぷりと仕返しをしてやったんだ♡

ほら、ああやって彼に密着しながら、勃起したちんぽを片手で握って…♡
突然の事に驚いてしまっている彼の唇を、今度は、私から奪ってやったんだ♡
くすっ…くすくすっ…♡　あぁそうだよ、べろちゅー手コキ、だよ…♡
予め唾液を塗り込んでおいた手の平で、ちんぽを上下に扱きつつ…♡
えっろい舌の動きで、彼の口の中を嬲って、犯してあげたんだ…♡

私の表情にも、余裕が戻り始めているだろう…?♡
逆に彼は、もがき苦しんでしまっているね…♡
全身をびくびくさせている…♡
人気AV女優の凄テクベロチュー手コキで、圧倒されているんだ…♡
お口の中をべろべろと弄られ、唾液手コキで童貞ちんぽを扱かれ…♡
射精、しちゃいそうになっているんだ…♡
彼ってば、惨めに腰を浮かせながら…♡
「…おっおっ♡凛ちゃんのべろちゅー手コキすごっ♡」などと騒いでしまっていて…♡

くすくすっ…通常であれば、時間をかけるべきシーンではあるのだが…♡
その時の私は、彼を虐め抜くことしか頭になくて…一気に畳みかけてしまったんだよ♡

●ニヤニヤ揶揄いモード継続
「せっかくだから、同じ台詞を君にも囁いてあげようか…♡
さあ、私に身を預けて…その可愛らしい耳をこちらに貸してくれ…♡」

●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。】
「くすっ…♡　どうだい童貞君、人気AV女優、秋元凛の密着べろちゅー手コキは…♡
んぅ…?♡　そんなに蕩けた顔になってしまって…♡　そんなに気持ち良いのか…?♡
なに…?♡　私のべろちゅーに依存しちゃいそうだって…?♡　くすっ…♡
君が堪能しているこの唇だが、沢山の男優にキスをされて、技術を仕込まれているからな…♡
そうだな…べろちゅー経験人数でいったら…軽く三十人は超えているだろう…♡
それくらいにビッチな唇で犯されてしまっているのだから、気持ち良いのは当然で…♡
くすっ…♡　普通の女とのキスでは…もう満足できなくなってしまうぞ…?♡

この手コキだって同じだよ…♡
本気を出せば、タフなAV男優を手際良く射精させられるほどの破壊力がある…♡
くすくす…♡　ほぉら…♡　このように、だなっ…♡
指で作った輪っかを高速で上下させてっ…♡　ちんぽを追い詰めてやるんだ…♡
しこしこしこしこ…♡　ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅっ…♡
なんだ…♡　もう限界か…?♡　憧れのAV女優に負けちゃいそうか…?♡」

●クレッシェンド&アッチェレランド。有声音になってもいいです。
いいぞ…♡　射精しろ…♡　金玉に隠してる精液ぜんぶ出すんだ…♡
憧れの巨乳AV女優、秋元凛のテクに負けて…♡　ザーメンぶちまけるんだ…♡
あぁでる♡　でちゃう♡　もうでちゃうな♡
くくっ♡
でる♡　でる♡　でる♡
ははは♡
あ♡あ♡あ♡あ♡あ♡あ♡
でる♡　でる♡　あ♡あ♡あ♡あ♡あ♡あ♡あ♡あ♡あ♡」
●ここまで囁き

●ニヤニヤ揶揄いモード継続
「くすっ…♡　くすくすっ…♡
あぁ…♡　彼、とうとう射精してしまったな…♡

彼の精液…あんなに沢山…♡
どろどろに濁った童貞ザーメンが、べーっとりと…
わたしの手にこびりついてしまっているよ…♡

物凄く濃厚だろう…♡　画面越しでも、イカ臭さが伝わってきそうだな…♡
この後カメラが寄ると…ほぉら、精液の泡立ちから、濁りまではっきりと…♡　くすっ…♡
何でも、オナ禁をしていたそうでな…それも一週間近く続けていたと言っていたよ…♡

全ては…憧れのオナペットAV女優、秋元凛に、濃厚な精液をぶっかけるため…♡
私に、自分の遺伝子の匂いを染み付かせるため…だ。そうだ♡　くす…♡

こうして見返してみると、私、かなり変態的な表情をしているな…♡
ここは台本には全くなかった部分なんだ。完全にアドリブ…♡
恍惚とした顔で手をかざして…だってすごいネバネバして、全然落ちないんだ…♡
ちょっと珍しくてね…
そんなザーメン眺めてると、なんだかすごくいとおしくなってしまって…♡
手に顔を近づけて…くんくんって、何度も何度も匂いを嗅いでいるだろう？
匂いに夢中になってしまったからうっかり顔を近づけすぎてしまって…
ほら、鼻の頭にちょっとザーメンが付いてしまった…♡
ちょっとだけ慌てたよ…どうやってごまかそうかなって考えて…
うっとりした顔そのまま…ほっぺにザーメンを…
べちゃああー…って
ふふふ童貞君のザーメンに頬ずりしたんだ…♡
肌に染み込んでいく濃ゆい精液に、酔ってしまっているかのような、どすけべ顔だ…♡
鼻の穴もせわしなく動かして…匂いを嗅ぎながら…♡
極めつけに…大袈裟に舌なめずりをして、彼のザーメンを啜り取っているよ…♡
べろん、れろん…と…舐め取って…♡
ここがポイントだ。すぐに口を閉じずに…唇と舌で精液の味と感触を確かめてから…
ごきゅん、と飲み込んで…♡
うわあ…自分でも少し引いてしまうくらいの淫らな顔だ…
やがてカメラが段々と引いていって…うん、ここで一度、ブラックアウトだね…♡」

●ニヤニヤ揶揄いモード継続
「くすくす…。　――さて、間もなく童貞君とのセックスが始まるよ。
大好きなAV女優のビッチまんこを使った、記念すべき童貞卒業セックス…♡
日本全国の秋元凛オタクが、嫉妬の炎を燃やした、筆下ろしシーンだ…♡

あぁ…始まったね…♡
くすっ…♡　私も彼も、いきなり全裸になっていたから、驚かせてしまったかもしれないね♡
最近は、着衣のままプレイするのが流行りではあるのだけれど…♡
やはり童貞卒業ものは、全てをさらけ出した、丸裸セックスに限るんだ…♡
お互いの肌を重ねて、濃密に絡み合ったほうが、童貞君の思い出に残るからな…♡

くすっ♡
真っ白なベッドに横たわった私に…彼が覆い被さってきて…♡
ビンビンに勃起したままのちんぽを、おまんこの入り口に宛がっているよ…♡
ん…？　あぁ、心配はいらないよ。
よく見てごらん、きちんとコンドームを付けているだろう？
さすがに童貞君の赤ちゃんを孕む訳にはいかないからね…くすっ…♡

ゴムを被せた勃起ちんぽで、私のおまんこの入り口を小突いているな…♡
初めての男の子は、なかなか勃起できないことも多いのだけれど…彼は違っていたね…♡
もう私を…秋元凛を犯したくて犯したくてたまらない、という様子だった…♡

ただ一応、AVのコンセプトに従わなくてはならないからな…♡

あぁ…ほら、画面が切り替わって…♡
ホテルのモニターに、私が出演している別のAVが流れているだろう…？♡
彼には、そこに映っている有名男優の腰の振り方を真似してみてくれ、と伝えてあるんだ…♡
彼がちらちらと横目でモニターを見ているのは、そういった事情でね…♡
そのまま…意を決してから、震える腰を前に突き出していって――…♡

397 ●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
398 ●最初は息を吸う音です。そこで予感を感じさせてからの、挿入音のオノマトペ。
399 「すぅ、はぁ――♡　…ぬぷぬぷぬぷぅ♡　…ずっぷぅん♡
400 あはぁっ…♡　童貞君のちんぽ、入っちゃったなぁ…♡
401
402 腰と腰が、あんなにぴったりとくっついてしまっていて…♡
403 すっぽんぽんの身体で、ぎゅーっと密着しながら…♡
404 ちんぽとおまんこを擦りつけ合いながら、ねっとりと見詰め合う二人…♡
405
406 どうだい、まるで本物の恋人同士のようだろう…？♡
407 君だけの彼女であるはずのこの私が、寝取られてしまっている、ようにも感じるかな…？♡
408
409 くすくすっ…♡
410 私、彼の背中に手を回して…「動いてくれ♡」とお願いしているよ…♡
411 そしたらもう、彼の我慢は限界に達して…いきなり激しく腰を打ち付け始めたんだ♡
412
413 横で流れているAVを確認しながら、見よう見まねで腰を振りまくっているね…♡
414 でもそれは最初だけ…♡　後は本能に任せて、乱暴さが増していく…♡
415 腰を大きく前後に振って、ぱん、ぱん、と肉がぶつかる音をわざと響かせたり…♡
416 皮被り童貞ちんぽで、生意気にも、私の子宮口を突いてきたり…♡
417 犯すという表現がぴったりなピストン…だろ…？♡
418
419 くすくすっ…分かるかい…？♡
420 彼は、日本中の男からオナペットにされているAV女優、秋元凛を独占しようとしているん
421 だ…♡
422 僅かな希望に縋るように、一生懸命に私を抱いているその姿…♡
423 改めて見ても、やはり、胸がくすぐられるような感覚がするな…♡」
424 ●ここまで囁き
425
426 ●ニヤニヤ揶揄いモード継続
427 だが、彼の激しいピストンも長くは続かない…。
428 初めてのセックスというのは、想像以上に疲れるものだから…。
429 ああやって、途中でくたびれてしまったんだ。
430 力の抜けた身体で私に覆い被さって、熱い吐息を漏らし続けているだろう…？
431 …だから私は、彼の頭を撫でてやりながら、こう囁いてあげたんだ♡
432 「キミはよく頑張った♡あとは、この秋元凛に任せてほしい♡」とね…♡」

●ニヤニヤ揶揄いモード継続
「…くすっ♡　そこからは攻守交替さ…♡
脱力した彼を組み伏せて、私が上になったんだ。
女性優位で、見応え抜群な体位、騎乗位、だな…♡
私の艶めかしい肉体を、隅々まで楽しむことも可能だ…♡
初めての緊張と疲れで少しチンポも柔らかくなっちゃっててね…♡
彼もちょっと焦ってたところがあったんだ。
だからほら、落ち着かせるように彼の頬に手を添えて…
彼の目をじっと見て…
●「」内ラブラブ純愛風
「私のことだけ考えて♡」って…
まあその時だけなんだけど、
「私はあなたを愛してるんだよ♡」っていうのを全力で伝えて…
そしたらわたしの中で、またチンポがムクムク膨れ上がったんだ…♡
彼もふぅふぅ息上げて、復活したみたいだから…
今度は一転激しく…あんな風に彼を押さえつけながら、腰を振ったんだ。
お尻の肉を叩きつけるように、ばちゅばちゅと上下に振ったり…♡
或いは、腰をグラインドさせて、AV女優まんこで童貞ちんぽを嬲ったり…♡
●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
「…どうだい、たまらないだろう？♡
君だけの彼女が、弱々しい童貞君を一方的に犯しているんだ…♡
沢山の男優ちんぽから精液を搾り尽くしてきた、クソビッチ名器まんこで…♡
彼のハジメテちんぽを徹底的に締め付けて、扱いて…♡
文字通り、おまんこでちんぽを食べちゃっている…♡　そんな感じがするね…♡
くすっ…♡　最後までよ～く見て、その目に焼き付けてほしい…♡
最愛の彼女が…君以外のちんぽを喜んで受け入れているんだぞぉ…♡
私の方から、がんがん腰を振っている訳だから…♡
もはや、寝取られにすら見えないかもしれないが…♡
くすっ…♡　くすくすっ…♡」
●ここまで囁き

469 ●ニヤニヤ揶揄いモード継続
470 「間もなくして…弱りきってしまった彼に、私はとどめを刺したんだ。
471 上半身を屈めて、両脚をがに股気味に開いて…唇では彼の乳首に吸い付いて…♡
472 いわゆる、乳首舐めスパイダー騎乗位、というやつだな…♡
473
474 あれ、やられている方は、本当に気持ち良いらしいよ…♡
475
476 性感帯である乳首をぶっちゅりと吸われて…♡　金玉がぐつぐつになって…♡
477 熱く沸騰した精液を、今すぐに吐き出したくなってしまうらしい…♡
478 …あぁ、そうか♡　君にはまだ…してあげていなかったね。
479 大丈夫だよ。近いうちに同じ事をしてあげるから…♡　くすっ…♡
480
481 それで…もちろん、彼はすぐに射精してしまいそうになっていたよ♡
482 「秋元さぁん♡ぼく、もう射精しちゃう…♡」なんて泣き付いてきたんだ。
483 くすっ…♡　あんな風に懇願されたら、応えない訳にはいかないからね…♡
484 最後、私は思い切り腰を振り始めたんだ…♡
485 すると、彼が私の身体にしがみついてきて…♡
486 とても惨めな声で…耳元で、こう、囁いてきたんだよ…♡」
487
488 ●ここから囁き有声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
489 ●わざとっぽい喘ぎ声
490 「んぁ…♡あぁんっ…♡あぁ…♡あん…♡あぁんッ…♡
491 んっ…♡んんぅっ…♡やだぁ…♡でちゃうっ…♡でちゃうっ♡
492 毎晩頭の中でオカズにしていたAV女優、秋元凛のおまんこに…♡
493 僕のくっさぁい童貞ザーメン、全部でちゃうっ…♡
494 あんっ…♡あぁんっ…♡んっ♡おっ♡おっ…♡おぉっ…♡
495 あぁイク…♡イクイクっ…♡もう我慢できない♡イっちゃうっ…♡
496 AV女優おまんこに精液でるっ♡日本中の男のオナペットにされてる女に、種付けするっ♡
497 孕ませるっ♡孕ませてやるっ♡秋元凛ちゃんの子宮♡僕のものにしてやるっ♡
498 オナ禁して金玉に溜め込んだ濃厚精液で♡秋元凛を妊娠させてやるっ♡
499 ぁぁイク♡イクっ♡イクイクっ♡イクイクイクッ…♡♡イクッ…♡
500 ●ここまで囁き
501
502
503
504

●ニヤニヤ揶揄いモード継続
「くすっ…くすくすっ…♡
確か…こんな感じだったかな…♡
そしたら、ほら…♡
彼、全身をぶるぶると痙攣させて…♡
そのままぁ…♡

――ぶびゅっ…♡ぐびゅっ♡ぶびゅっ♡ぶっ、ぴゅぅ…♡

と、溜め込んできていた童貞ザーメンを、ぜーんぶ射精してしまったんだ…♡

やがて私は腰を持ち上げて、彼のちんぽからコンドームを奪い取って、口を結んだ…♡
巷では、使用済みコンドーム、と呼ばれているそれの…♡
たっぷりと精液が溜まっている部分に、ちゅっ、と口付けをしながら…♡
「これからも秋元凛の筆下ろし企画は継続していきます♡」
「日本全国、秋元凛オタクの童貞さんからのご応募待ってます♡」
と、にやついた表情で宣伝してやったんだ…♡くすっ…♡

どうだったかな。童貞君の筆下ろしモノは。
羨ましさと悔しさで、頭、おかしくなってしまいそうになっただろう…？♡
だが私は、これからも他の童貞君と同じようにえっちをしていくんだ。
今のうちに慣れておいた方が…君自身のためにもなると思うよ。くすっ。

…さて、これでこのAVは終わりだが…。
君が持ってきた他の作品についても、同じように語って欲しいのか？
くすっ…もちろんいいよ。大好きな君からのお願いなんだから。
それじゃあ、少し休憩をしてから、次の解説に移ろうか。くすっ…。」

★シーン2
●ニヤニヤ揶揄いモード
「さてと…次はどの作品を一緒に見てほしいんだい。
ふふ、今更恥ずかしがることはないだろう。
…君ってば、やっぱり可愛い奴だな。

んっ、あぁ…それが見たいのかい？
「温泉旅館でドスケベ敗北アクメシリーズ
話題のクール巨乳女優秋元凛 バーサス 妖怪鬼イかせおじさん 絶頂我慢ゲーム編」か。
へえ…まさか、君がその作品を見たいと言ってくれるなんてね。
これも、以前は見たくないと言っていたはずだが…。
何か…気が変わったのかい？

●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
「もっと私のことを深く知る為に、全部見るべきだと思った」…とか？
●ここまで囁き

●ガチ照れ笑い。ひん曲がえりには珍しいラブラブモードで。
く、くくくく、
ああ、ごめんごめん
…なんというか、自分で言っていて恥ずかしくなってしまった。
すまない、笑うところじゃなかったな。
一度真剣に言わせてくれ。
君と同じように、私も君のことが大好きだ。
辛くても私の全てを知ってくれようとする君が世界で何より愛おしい。
ありがとう。本当に愛してる…

…よしそれじゃあ、きっちりと、この作品についても語らせてもらうよ。
私の全てを君に知ってもらうために…な。
くすくすっ…♡

いいかい？再生するよ…。

●ニヤニヤ揶揄いモード
「くすっ…ごめんね、いきなり驚かせてしまったかな。
冒頭のシーンから、愛する彼女が、あんなに太った中年男優に抱き締められているだなんて…。
想像すら…していなかっただろう…？
ふふ。この撮影のロケ地はね、温泉が有名な旅館だったんだ。
良い部屋だろう。綺麗な畳が敷き詰められていて、窓の外には自然が広がっていて…。
もし君と旅行に行けたとしたら、それは心安らぐ最高の旅になるとは思うのだけれど…。
生憎、その時は…あの男に…髪の毛が薄く、頭皮が丸見えの、醜く太った中年男優と一緒だったからね。
とても、和室の雰囲気や景色を楽しめる気持ちではなかったんだ…くすっ…♡
全身から汗臭さを漂わせる、ハゲでデブのおじさん男優…♡
彼には幾つか異名があってね。
鬼イカせおじさんだとか、顔舐め、唾飲ませおじさん、とも呼ばれていて…。
一部ファンの間では、とても親しまれているようだよ。
ただ…私はね、彼が苦手であると公表しているんだ。
だから、彼との絡みには NG を出し続けていたのだけれど…マネージャーに押し切られてしまってね。
この通り、旅館にて、絶頂我慢ゲームに挑むはめになってしまったんだ…♡
恐らく君も、あの男に対する嫌悪感を抱いていると思うが…。
私も同じだったんだ。けれど、撮影に挑んだ。
だから君も我慢して、最後までこの映像を見てほしい…♡
くすっ…ほら、私の背後にぴったりと密着したあの男が…私のうなじに鼻を寄せているね。
ふごふごと、豚みたいな鼻息を立てながら、甘い匂いを堪能しているんだ。
だが、まだ私の身体には触れてこない。あえて焦らしているんだよ。
ただただ、陰湿にうなじの匂いを嗅ぎつつ、たまに…べろりと舐めたりもしながら…。
あの男は、カメラに向かって、今回の絶頂我慢ゲームのルールを説明し始めたんだ。
まず、私が一回でも絶頂に達してしまったら、口と口とのキスを許すという事。
次に、三回イってしまったら、あの男におまんこを触らせるという事。
最後に、もし…十回以上イってしまったら…その時は、生ハメファックをされてしまう、という事。
これらのルールに従い、撮影を開始してもいいかという質問に…。」

●ニヤニヤ揶揄いモード
「私は、一瞬だけ、首を横に振ろうと思ったのだが…。
負けず嫌いな性格が邪魔をして、…了承、してしまったんだ。

それにね、その時は、負けるはずがないと確信していたんだ。
AV女優として、これまで何本もの作品に出演してきたが…。
一度の撮影で、十回もイってしまうことなんて、まずなかったからね。
絶対にありえない。こんな不潔なおじさんに、屈服するはずがない。
何なら、お蔵入りにしてやろう、くらいの気持ちで撮影に臨んだんだ。
…だが、すぐに後悔することになったよ♡
映像を見ながら、また耳を貸してくれるか…？♡」

●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
「ほら…勝負を受けると宣言した途端に、服の上から全身を撫でられてしまってね…♡
肩、二の腕、お腹、腰、太腿と…ねっとりと揉まれてしまったんだ…♡
あの男の手つきはいやらしさの塊で、次第に、私の身体も熱くなってしまって…♡
気づかぬうちに、「んぅ…♡あぁ…♡あん…♡」と喘いでしまっていた…♡
見えるかい、私の表情…♡
快楽に抗えず、蕩けそうになってしまっているだろう…♡

それもまだ…胸や股間といった、性感帯を触られていないのにも関わらず、だ…♡
あの男の手の温もりが、私の体温を浸蝕してきて…♡
身体の芯が、きゅうきゅうと疼き始めていて…♡
あぁ、ほら…身を捩って、逃げようとしているな…♡
でも、あっさりと押さえつけられて…♡
あの男の低い声で、叱られてしまう…♡」

●気持ち低めの声で、男優の真似をするように
「「おい逃げるなよ♡男勝りでクールな性格が売りなんだろ♡」
「秋元凛は、途中でケツ振って逃げるような女じゃねえだろうが♡」って…♡

そのまま…あの男は、私の胸を、おっぱいを…ぎゅう、と握り潰して…♡
太い指先で、服の上から乳首を抓り上げてきたんだ…♡

●囁き無声音
「そしたらもう、身体の内側に溜まっていた快楽が一気に爆発して…♡
気付いた時には背筋を反らし、腰を浮かせて、イってしまっていたんだ…♡
不思議な感覚だったよ…♡
嫌いなのに、悔しいのに、イクのをとめられなかった…♡
寧ろ抵抗すればするほど気持ち良さが増して、頭が真っ白になってしまって…♡

あぁっ…だめだぞ、目を逸らさないでくれ…♡
ちゃんと見てほしいんだ…♡
…大嫌いなおじさん男優に、私がイかされてしまっている姿を♡
ほら、もうすぐだ…♡
イヤイヤと首を振りながら…背中が曲がって…
…びくんっ…びくびくっ…て♡
くすっ…♡くすくすっ…♡」
●ここまで囁き

●ニヤニヤ揶揄いモード
「休んでいる暇などないよ。
…君も、そして映像の中の私もね。

タイトル通り、クールぶったAV女優、秋元凛を屈服させ、アクメ地獄に追いやる為に…♡
あの男は、絶え間なく快感を与え続けてきたんだ…♡

ほら…今度は胸を揉みながらの…ねちっこいべろちゅー責め、だよ…♡
ルールに基づいて解禁された、口と口とのキスで…また追い詰められてしまっているんだ…♡
ぶちゅぅ…ぶっちゅぅ…べろべろ…れろれろ…♡
やがて、口を大きく開くように命令されてね…♡
あぁ…♡あの男のくっさい唾液を…強制的に飲まされてしまっているだろう…♡
ごっくんと、唾液を飲み込んだら、すぐにまたキスが再開して…くすっ…♡

どうだ…えっろいキスだろう…♡
私のもちもちの唇がぐっぽりと覆われて、じゅるじゅると吸われていて…♡
あまりにも激しいキスに、こちらが怯んだ隙を狙って、唾液が流し込まれる…♡
あの男の唾液を吐き出すことは、決して許されないんだ…♡
ねっとねとで、黄ばんだ涎を…何度も咀嚼させられて…♡」

677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712

●ニヤニヤ揶揄いモード

「ごきゅん、と音を立てながら喉に押し込み、その苦みを味わうように、命じられたよ…♡
それを終えたら、口を開いて、唾液が残っていないことを見せびらかす…♡
そうするとご褒美と称して…舌を絡ませ合うべろちゅーをしてくれる…♡
まるで恋人同士かのように、べろんべろん、れろんれろんと…舌で愛し合うんだ…♡
くすっ…♡あぁっ…♡大変だ♡私の身体が痙攣してしまっているな…♡
そういえば、この時、べろちゅーだけでイかされてしまったんだっけ…♡
すっかり忘れていたよ…♡くすっ…♡すまないね…♡
信じられなったよ…キスってこんなに気持ちいいものなんだって、初めて知ったよ…♡
それで…♡うわぁ…♡
絶頂に震え、無防備になってしまった私の上半身から、衣服が奪われてしまったね…♡
下着も関係ない…邪魔だと言わんばかりに脱がされて、あっという間に上半身裸になってしまった…♡
ほらq、画面いっぱいにが私の身体が映し出されているぞ…♡
ほんのりと火照った肌…重たそうな巨乳、そそり立った乳首…♡
次に…あの男の、ぎらついた瞳が映り込んで…♡
あぁ…♡狙われている…♡狙われてしまっているよ…♡
君の彼女の♡秋元凛のおっぱいが…♡勃起乳首が…♡
今にも食べられてしまいそうになっているんだ…♡くすっ…♡
…でもね、あの男はすぐには襲い掛かってこなかった。
汚れが目立つ下品な舌で、私の頬をべろりと舐め上げて…。
さすがにこれ以上イってしまうことはないだろう、と尋ねてきたんだ♡
くすっ…あぁ、私は「当たり前だ」と冷静に答えたよ…♡
お前なんかにこれ以上イかされたりなんかしない…♡
例え乳首を舐められようが、これ以上は絶対に…と…♡
くすくすっ♡」

【●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。】
「結果は…ご覧の通りだ♡
あの男を睨んでいたはずの私は、その数秒後に、絶頂の快楽に蕩けてしまっていたんだ♡
凛々しい顔つきから一転、どすけべなイキ顔を晒してしまったんだ…♡」

●囁き無声音
「勃起した乳首に、黄色く濁った唾液を塗りたくられて…♡
分厚い唇に激しく吸い付かれてしまい、イってしまったんだよ…♡
イっている途中、自分の胸元から匂ってくる、あの男のくっさぁい涎の匂いに…♡
全身が痺れるほどの不快感を覚えながらも、それがまた心地よくて…♡
あの男の肉厚で汗臭い身体に抱き付いてしまいながら、絶頂を繰り返してしまった…♡
あぁ…私も驚いたよ…。
まさか、自分がこんなにもあっさりと敗北してしまうだなんて…♡

認めたくなかった私は、辛うじてまだ耐えられている、という演技をしてみたんだが…♡
それが余計にあの男を苛立たせてしまって…♡
顔を…舐められてしまった…♡
忘れてはいないだろう。彼の別名は顔舐めおじさんだ…♡
鼻を重点的に舐めて、女優を匂いアクメに導く天才だなんて、信じていなかったのだが…♡
くすっ♡実際に顔を舐められている時の私の表情…君からはどう見えるかな…?♡
あぁ、そうだろう…♡
誰が見てもそう答えるよ♡
幸せそうな、屈服したメスの蕩け顔だと…♡

顔全体を満遍なく…特に、嗅覚を司る鼻をしつこく舐め回されて…♡
数日間歯磨きをしていないであろう、酸味のきつい涎の匂いに責められ…♡
私はついに…一段と強烈な絶頂に達してしまった…♡」

●再現台詞は、腹の奥から出すような、低めの声で
「低く唸るような…「おーっ♡おーっ…♡おぉっ…♡」…という情けない喘ぎ声と共に、な♡」

●ここまで囁き
●ニヤニヤ揶揄いモード
「ふふ…これで最初に決めた約束通り、
私は…おまんこへの接触を許さなければならなくなった。
でもまだ、完全に敗北が決まった訳ではない。
おまんこへの凌辱に耐えることができれば、あの男との生ハメセックスは避けられる。
そうだ…この時の私はまだ、諦めていなかったんだよ…♡
だからあんな風に、唾液でべっとべとの顔で、あの男を睨みつけているんだ…♡

●ニヤニヤ揶揄いモード
「だが、現実はそんなに甘くなかったんだ…♡
…くくく、どうしようかな…ちょっと目を瞑ってもらえるか？
…ありがとう。
目を開く前に言っておくぞ？これは今見たシーンから5分後の映像だ。
いいぞ？目を開いて…」

●ここから嘘も無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
「白い敷布団の上で…四つん這いになっている女が見えるか…？♡
惨めな牝犬のような姿で、お尻を突き出し、ふるふると震えていて…♡
そこに寄り添う男の指先で、おまんこを少し弄られるだけで、あっけなく潮を噴いているだろう…♡
口から零れる鳴き声は…「ごめんなさい♡許してください♡」という謝罪の言葉ばかり…♡

くすっ…信じられないかもしれないが、あれ、私だからな…♡
無理、だったんだ…♡
あまりにも気持ち良過ぎて…耐えられなかったんだ…♡

嫌悪していたはずの男に、おまんこの内側をいじくり回されるのは…♡
この後のことや、君のことも考えられなくなるほどに、凄まじい快楽でね…♡
あぁ…いま思い出すだけでも、子宮が下りてしまうよ…♡くすっ…♡

当たり前だが…彼も、立派なAV男優なんだ。
私が何十人もの男優と交わっているように…あの男も沢山の女優を抱いている。
つまり…そうだ。女のイかせ方…女を屈服させる方法を熟知しているんだよ…♡

くすっ…♡
焦らされて、焦らされて…それから、最も敏感な部分を虐められて…♡
そして私は…快楽の波にのみこまれて、何も考えられなくなっていく…♡
いつしか…お尻を叩かれるだけでも、イってしまうようになっていた…♡
私は枕に顔を埋め、「絶頂っていない」と主張しているが…♡
スパンキングをされれば、物凄い量の潮吹きをしてしまっているし…♡
にやついたあの男に、極太バイブを挿入された時にはもう…♡
ぷしゅっ、ぷしゅっと…♡軽く失禁までしているだろう…♡
だから…イキまくってしまっているのが、バレバレだったんだ♡」

785 ●囁き無声音
786 「くすっ…あれはたまらなかったな…♡
787 巨大なバイブに膣肉が掻き分けられていく感覚…♡
788 その先端が、子宮口に届いた時の、どうしようもない敗北感…♡
789 身体の内側がぎっちりと満たされている快感に、私は喘ぐことしかできなかったよ…♡
790 そのまま、極太バイブをぬっぽぬっぽと出し入れされたら…♡
791 成す術のない私は、無様におんおんと叫ぶだけの獣となってしまっていた…♡
792
793 ふふ、布団にしがみついて助けを求めているな…♡
794 助けなど…来るはずがないのに…♡
795 自分でも不毛であると理解しているのだが、やめられなかったんだ…♡
796 惨めな行為をすればするほど、快楽が膨れ上がってしまうからね…♡
797
798 くすっ♡
799 あぁほら…♡
800 一際大きい絶頂がくるぞ…♡
801
802 極太バイブを素早く動かされて…何度も何度もお尻を叩かれて…♡
803 物みたいに扱われてしまい…布団の上で身体を暴れさせて…♡
804
805 ●当時の様子を再現するように、余裕のない喘ぎ声で
806 「もうだめっ…♡やめてぇっ…♡これ以上イキたくないのぉっ…♡死んじゃうのっ…♡」
807 「おっ…♡おぉっ…♡だめだめだめっ…♡イクッ…♡むりっ…♡イっちゃうッ♡」
808 「あぁイクッ…♡イクイクイクッ…♡イクッ♡イックぅぅっ…♡♡」
809
810 くすっ…くすくすっ…♡あーあ…♡
811 君の大切な彼女、もう何回イかされてしまったんだろうなぁ…?♡」
812 ●ここまで囁き
813
814 ●ニヤニヤ揶揄いモード
815 絶頂に達してしまった、正確な回数は分からないが…。
816 私のくたびれ具合や、潮吹きによって濡れた敷布団の様子を見て…。
817 撮影現場にいる誰もが…十回は絶頂したと、そう確信していたんだ。
818
819 よって、最後の約束…大嫌いなあの男からの生ハメファックが確定してしまったんだ…♡
820

●ニヤニヤ揶揄いモード
「くすっ…♡
一人で立つことすらできない私を…♡
数人の撮影スタッフが抱きかかえて…♡
そのまま暗転して…いよいよ、最後のチャプターの始まりだ…♡

もう一度言うが、休む暇など与えないよ。
さあ、続きを見てくれ…♡

場所は変わって、旅館のお風呂…。
しかもここは…お・と・こ・ゆ、なんだ…♡

深夜で誰もいないとはいえ、独特の緊張感が漂っていたよ…♡
その時の私は、外部からの刺激全てが快楽に変換されてしまっていたから…♡
男湯に連れ込まれた、という事実だけで、また軽くイってしまっていたんだ…♡

そのまま、私はその場に跪かされ、あの男のちんぽを見せつけられた。
いわゆる、見せ槍…というやつだな。
モザイク越しでも分かると思うが…♡
あの男のちんぽは…かなり立派でな…♡
長さも太さも、平均を大きく上回った、凶悪な形をしていたよ…♡

ん…♡あぁ、当たり前じゃないか…♡

匂いだって凄かったよ…♡鼻が曲がってしまいそうだった…♡
酸味のある汗臭さと、チンカスのあの匂いが混じっていて…♡
臭くてたまらないのに、どこか癖になってしまう匂いでね…♡
だからああやって、あの男のちんぽの裏筋に鼻を擦りつけているんだよ…♡
まるで甘えているようにも見えるなぁ…?♡　くすっ…♡

●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
「それから私は、ゆっくりと立ち上がって壁に手をつき…♡
あの男に対してお尻を突き出して、ふりふりと、左右に振ったんだ…♡
「あなたにイかされて発情しちゃった生意気まんこを…犯してください♡」
「クールなイメージが壊れてしまいくらい、滅茶苦茶にハメ殺してください♡」
●ここまで囁き

●ニヤニヤ揶揄いモード
「…そんな台詞を添えて、必死になってちんぽを求めてしまった…♡
くすっ…。
妖怪鬼イかせおじさんと呼ばれている、醜悪な肉体をしたあの男。
思い出してほしいのだが、私は、あの男の事が大嫌いなはずだったんだ。
共演NGを出し、苦手であると公表してまで、避けていたはずだった。
だが…この時の私はもう…♡
くすっ…あぁ、そうだろう…♡
完全に、あの男に恋をしている顔、だろう…?♡
だから…お尻を振って…求愛をしてしまっているんだ…♡
くすっ…あぁ…遂に私のお尻が掴まれてしまったな…♡
そして、たっぷりと脂肪がついた、あの男の身体が密着してきて…♡
コンドームをつけていない生ちんぽが、私の、中っ、にぃっ…♡」

●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
「…ぬぷっ、ぬぷぬぷっ、ぐちゅっ、ずっちゅぅん…♡
ほら、よぉく見てくれ…♡
腰と腰が隙間なく密着しているだろう…♡
焦らしなどなく、一気に奥まで、挿入されてしまったんだよ…♡
君の彼女の、とろとろAV女優おまんこの中に…♡
おじさんの生ちんぽが、ぐっぽりと、入ってしまったんだ…♡」
●ここまで囁き

●ニヤニヤ揶揄いモード
「その時の気持ちだが…なんというか、不思議な安心感に包まれていたような憶えがあるよ。
お腹の内側が…あの男のちんぽで、みっちりと満たされていて…。
嫌いだったはずの汗臭い身体に、抱き締められて…。
私は…涎を垂らしてしまいながら、恍惚としていたんだ…♡
くすっ…♡
あぁ、説明ばかり聞いていないで、映像を見てくれ♡
始まる、始まるぞ…♡
敗北アクメシリーズ名物の、高速ピストンだ…♡

数々の女優を本気で泣かせてきた、極悪非道な腰振りが、くるぞっ…♡」
●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
「あはっ…♡あぁ…♡
犯されてしまっている、な…♡
見てくれよ、私の憐れな姿を…♡
分厚い腰をぱんぱんと激しく打ち付けられて…♡
ぶっといちんぽで、何度も子宮を揺らされて…♡
たぷたぷと揺れていたおっぱいも鷲掴みにされて、握り潰されて…♡
人気AV女優であるこの秋元凛が、完全にオナホ扱いされているだろう…♡
ぱんぱんぱんぱん…♡どちゅどちゅどちゅどちゅ…♡
ぱんぱんぱんぱん…♡どちゅどちゅどちゅどちゅっ…♡
身体全体を突き上げられながら、子宮口をしつこく殴られて…♡
あまりにも凄まじい勢いに、眩暈すらしていたよ…♡
頭の回転も鈍くなっていってね…♡
「あぁ、もしかしたら、この人こそが運命の相手なのかもしれない…♡」
「この人と結婚して、赤ちゃんを孕ませてもらいたい♡妊娠したい♡」
…などと、君を裏切るような事まで考えてしまっていたんだ…♡
本来、恋人同士でするはずの、繁殖行為であるのに…♡
思いやりの感じられない、容赦のない高速ピストンで犯されて…♡
私はもう――数秒おきに絶頂に達してしまっていて…♡
けれどその場に倒れることすら許されず、ひたすらハメ殺されてしまったんだ…♡」
●ここまで囁き
●ニヤニヤ揶揄いモード
「くすっ…♡
このAVのタイトルに相応しい、高速ピストンで責められ…♡
私の身体からは、すっかりと力が抜けてしまっていたんだが…♡
その時にね、あの男に抱き上げられてしまったんだ…♡
何をされているのかと、事実を確認する余裕すらなかったから…。
気付いた時にはもう既に、この…みっともない体位で犯されていた…♡
そうだね、駅弁、と呼ばれている体位だね…♡」

●ニヤニヤ揶揄いモード
「逞しいオスに、弱いメスが抱きかかえられて…♡
地に足がついていない状態で、ひたすらちんぽで犯されてしまう…♡
とろとろになった頭でも、これはまずい、という危機感は確かにあったのだが…♡
私には反撃の手段が残されていないから…あぁ、ほら…♡」

●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
「ぱんぱんぱんぱん…♡　ぱんぱんぱんぱんッ…♡

あの男が、私の白い身体を抱き締めながら、腰を振りまくっているぞ…♡
断末魔にも似た雄叫びを上げていて…あれでは…まるで強姦魔だな…♡
となると私は、男湯でレイプ被害に遭っている女の子…となるはずなんだが…♡
くすっ…♡あぁ、さすがにもう分かっているか…♡
レイプに近い扱いを受けているというのに…私は…♡
脱出不可能なあの男の腕の中で、イキ狂ってしまっていたんだ…♡

あぁ、またくるぞ…♡
目当ての女を手に入れる為の、殺人ピストンだ…♡
不健康な色合いの、分厚い腰が…何度も何度も振り上げられてっ…♡
どちゅっどちゅっどちゅっ、ばちゅっばちゅっばちゅっ♡

周囲に体液が飛び散る程激しく、熱烈に、犯されているな…♡
私は、イク度に上ずった声で喘ぎ鳴いて…潮吹きをしまくって…♡
撮影中であることも忘れて、女優としてではなく、一匹の牝として快楽に浸っているんだ…♡
あとはもう、あの男が果てるまでその繰り返しだった…♡
私は、あの男の、汗でべったりと濡れた胸に顔を埋めて…♡
そこから香る体臭に溺れながら、おまんこやお尻を震えさせる…♡
両脚をピンと伸ばしては潮吹きをして、そして、失禁をしてしまって…♡
僅かな希望に縋るように顔を上げれば…♡
あの男から唾を垂らされて…顔を舐められて…唾液の匂いで責められる…♡
まさに八方塞がりだった…♡
このままあの男にハメ殺される道しか、残っていなかった…♡
だからもう…降参♡してしまったんだ…♡
快楽地獄から一秒でも早く抜け出す為に、あの男に精液をおねだりしたんだ…♡」

●ここまで囁き

●囁き有声音
●語り口調とは違う、雄に媚びる甘い声色で
「「生意気な女でごめんなさい♡もう共演NGとか言いませんから♡」
「あなたのお嫁さんになって♡あなたのザーメンで赤ちゃん作りますから♡」
「私の♡秋元凛の卵子に♡ご主人様の濃厚な精液をぶっかけてください♡中出ししてください♡」
とね…♡」

●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
「私の媚びた台詞の後、あの男は…すぐに身体を硬直させたよ…♡
それで、極太ちんぽで、子宮口にぶちゅ～っとキスをしながら…♡
びくんびくんと身体を痙攣させて、精液を吐き出そうとしてきたんだ…♡
あぁイクぞ…♡イってしまうぞ…♡
君の彼女の子宮に♡おじさんザーメンが注がれてしまうぞっ…♡
二人の横顔のカットインが入って…♡
腰と腰が、ぴったりと密着している様子が映し出されたら…♡
ほらっ…♡あぁッ…♡

どぴゅっ♡ぶぴゅっ♡ぶぴゅっ♡ぶっ、ぴゅぅ～っ…♡
ぐびゅっ♡ぐびゅぅ♡どぷどぷっ、どっぴゅぅっ…♡

くすっ…くすくすっ…中出し、されてしまったね…♡
暫くの間、二人は抱き締め合ったまま、腰を押し付け合って…♡
互いを労うように、唇を重ねて舌を絡ませたり、ほっぺを舐め合ったり…♡
やがて、あの男の腰がゆっくりと離れていくと…♡
ぐっぽりと開いてしまったおまんこからは、白く濁った精液が大量に溢れ出す…♡

ごぽっ、ごぽっと…とめどなく漏れ出してしまっているだろう…♡
精液が…ぶっとい糸を引いて…床に垂れていく…♡

くすっ…♡あーあ…残念…だったな…♡
大切な彼女の子宮に、あんな男の精液が注がれてしまって…♡
君は私のことが大好きだから…悔しくて仕方がないだろう…♡
でも大丈夫だ♡心までは奪われていない…♡
そうだ…寝取られてなんかいないから、な…？♡くすっ…♡」
●ここまで囁き

●ニヤニヤ揶揄いモード
「…とまあ、映像自体はここで終わりなんだが…。
大事なことを一つ、君に伝えておくよ。
もしかしたら、本当に私が中出しをされてしまった…と思っているかもしれないが。
あれは、AV 制作の場ではよく用いられる、疑似精液、というやつでな。
卵白やスキムミルクを混ぜて作られる、偽物の精液なんだ。
それを事前に私の膣内に入れておき…。
撮影や編集の際に上手くカットを入れ込むことで…。
まるで本当に膣内に射精されてしまっているかのように見せる演出だ。
だから、その点については安心してほしい。
…そもそも、いくら AV 女優とはいえ、君以外の男から中出しをされるなんてありえないよ。
くすっ。大丈夫。
私の子宮は…おまんこは…彼氏である、君だけのものなんだから。」

★シーン3
●明るくワキワキと。
「くすっ。そっと、最後まで残しておいたのはどれなのかな…？
君は、食事でも好きなものを最後にとっておくタイプだろう。
くすっ。だからきっと、とっておきの作品、なんだろうなぁ…？」

●予想外の作品に驚き、息を吸い込んで唇を噛むイメージ
●本作品に関しては、疑似中出しではなく、本当に中出しされてしまう為
「…んっ。
あ、あぁ…なるほど、これ、だったのか。

「南国リゾート寝取られ旅行
　僕と永遠を誓った花嫁が、ミニスカウエイトレス姿でやリチン男に寝取られる」…だな。

そうか…。なるほどな…。
念の為、最初に伝えておきたいのだけど…。
この作品は、見ているファンの皆を…君を、「私の夫」に見立てて…。
そして、作中に登場する有名男優に私が寝取られてしまう、という内容になっている。
要は、寝取られ要素が強い作風になっているのだが…。
君は、それでも本当に…見たいと思うか…？

…くすっ。分かったよ。
君がそこまで言うのなら、一緒に見ようじゃないか。
但し、途中で怖くすぎて泣いてしまわないように注意してくれよ。

それじゃあ…再生するね。

あぁ――まずは雰囲気作りからだ。
画面いっぱいに、鮮やかな色味で、砂浜の景色が映し出されていく…。
どこまでも蒼い空。エメラルドグリーンの海。ヤシの木。貝殻…。
そして、ゆったりとした流れを維持したまま、ホテルの部屋に移っていくんだ。
かなり広々としたホテルだろう。
それに窓からは、空と海が織り成す絶景が見えるんだ。
聞いた話によると、一泊十万円以上するそうだよ。
正真正銘、本物の南国リゾートホテルという訳だ。」

●ニヤニヤ揶揄いモード
「くすっ…。
ここが、花嫁役の私…秋元凛が、寝取られてしまう舞台、だよ。
ほぉら、始まったよ…。
私と男優さんが、ベッドの上で座っているね…。
二人共、肌の露出が多めの、夏らしい私服姿だ。
私は灰色のタンクトップ姿だな…あれは、汗染みが目立ちやすくて恥ずかしいのだが…。
下はデニムのショートパンツで、むっちりとした太腿が丸見えだ…。
一方で男優さんは、緩めのTシャツを着ていて、胸元を開いている。
もしかしたら、不良っぽい印象を受けるかもしれないね。
あぁ、…ミニスカウエディングは、後半に登場するよ。くすっ。
そんな二人が…夏の景色を背に…ゆっくりと、抱き締め合って…。
誰にも気付かれぬよう、そっと唇を触れ合わせてから、見詰め合う…。
視線が絡み合って、吐息が交わって、次第に性欲を膨らませていく…。
そこからはもう…AVに相応しいような、濃密なべろちゅーの始まりだ。
まずは引きの状態での撮影で、抱き締め合う私と彼の全身が映し出されているね。
鍛え上げられた彼の身体は、ほんのりと日焼けしていて、逞しさに満ち溢れている。
実際、どこを触っても…硬い筋肉に覆われていたよ。
あんな立派な身体に抱かれてしまうと、それだけで女は期待してしまうものなんだ。
沢山の男の身体を知っている、私のようなAV女優であれば…尚更の事。
抱き締められ、唇を奪われるだけで…凄まじい快楽に嬲られている自分を想像してしまう。。
それに、ね…これは君にも秘密にしていたことなのだけれど…。
この男優さんは…私がずっと憧れていた人なんだ。
女性向けのAVにも多数出演していてね。
私と同じ世代の女子であれば、皆、名前くらいは知っているはずだ。
甘いマスクで女を惑わせるイケメン男優。
…なんて、雑誌で紹介されるくらい、有名だからね。
AV業界にあまり興味のない君は…初めて見たのかもしれないけれど…。
くすっ…浮気、ではないよ。
君にだって、好きなアイドルやタレントくらいはいるだろう?」

●ニヤニヤ揶揄いモード
「その位の感覚だと思ってくれていい。
純粋に、遠い世界の人として憧れていただけだ。
ただこの業界が特殊で…。
肉体を交える機会がある、というだけ…。

●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
くすっ…あぁほら、私と彼の口元がアップになったね…。
二人の唇が、蛞蝓のように絡み合っている…♡
相手の上唇を甘噛みしあったり、舌先でくすぐりあったり…♡
けれどやはり、ぐっぽりと唇を重ね合わせて、大胆な快楽を求めるんだ…♡
れろれろ、ぶちゅぶちゅ…れろれろれろ、ぶっちゅぅ…♡
口の中から…いやらしい音が響いているな…♡
視聴者からは…君からは見えない、お口の中で、激しいべろちゅーをしているんだ。
それはもう、舌と舌でのセックスと表現しても良い程のもので…♡
これから、憧れの男優さんに寝取られてしまうのだという背徳感も相まって…♡
私は…甘イキ、してしまったんだ…♡　くすっ…♡

突然震えてしまった私に、彼は「大丈夫かい」と優しく声をかけてくれたのだが…♡
こちらが頷く前に、再びキスをしてきて…あぁほら、胸まで揉んでいるだろう…？♡
服の上から、柔らかいおっぱいを、しつこく揉み潰されているんだ…♡
憧れのあの人に、そんなことをされてしまったら…♡
当然だけど耐えられるはずもなくて…私はもう一度、お尻を浮かせながらイってしまう…♡
くすっ…♡
ようやく彼のキス責めから解放された時の私の表情、見てくれよ…♡

あぁ…君以外に見せてはいけないはずの、恋する乙女の顔に…なってしまっているね…♡
そんなだらしない顔のまま、カメラ目線になった私は…♡
「あなた、ごめんなさい…♡私、これから彼に気持ち良くしてもらいます…♡」
と、寝取られ宣言をしてしまったんだ…♡」
●ここまで囁き

●ニヤニヤ揶揄いモード

…さて、雑談をしている間に次の場面に変わっているね。
ここからはいよいよ、ミニスカウエディングドレスに身を包んだ私が登場するよ…♡
画面の端から白いドレスが映り込んで…どすけべ花嫁姿のお披露目だ…♡

高級感と清潔感が両立する中に、明確な卑猥さが落とされた…淫靡な衣装。
ふわふわとした綺麗な飾りつけに目が移りがちだが…♡
よく見てみると、ドレスの生地が肌に密着していて、身体のラインを浮き立たせている…♡
デザインもほぼワンピースのような形で、特に胸は、必要以上に寄せ上げられていて…♡
ただでさえ目立つGカップ巨乳が、余計に悪目立ちしてしまっているな…♡

純白の花嫁でありながら…淫乱でどすけべなおまんこ女でもある…♡
そんな矛盾が――だからこそ視聴者や君に、下品な興奮を抱かせるんだ…♡

んっ…あぁもちろん、ウエディングドレスを着るのは、この撮影が初めてだったよ。
本当であれば、君と結婚する時まで、大切にとっておきたかったのだが…♡
憧れの彼に、花嫁衣装が見たいとお願いされてしまって、断れなかったんだ…♡
本当に申し訳ないね…♡
その代わり、最後まで解説するから、許してほしい…♡

ほら…私が、その場でくるりと回転をして、ミニスカを靡かせているよ…♡
意図的に…パンチラを演出しているんだ…♡
たかが一瞬、ドレスと同じ、純白のパンツが見えてしまったというだけなのに…♡
私は…顔を赤らめて、恥じらってしまっている…♡
その次の、スカートを摘まんでパンツをはっきりと見せろという指示にも…従う、のだが…、
俯いて、彼やカメラから視線を逸らしてしまっているね…♡
このシーン、ファンからは「とてもかわいかった」「僕も結婚したい」なんて感想が届いたんだ。」

●ニヤニヤ揶揄いモード
「他にも「秋元凛ちゃんのウェディングショーツ、くそえろい。盗んで匂い嗅ぎたい」という声もあったかな。
くすっ…♡　君も…そう思ってくれたかい…？♡
私のミニスカウエディング姿をたっぷりと映し終えたら…。
いよいよプレイに移っていくよ…♡
貞淑な所作で、その場に跪いた私と…♡
それに合わせて、ズボンを脱いでいく彼…♡
彼は、どこかじらすような動きも交えてきたんだ。
ああやって、パンツ一枚のまま、その下でちんぽをビクビクと動かしたりして、ね…♡
布越しに漂う濃厚な匂いや、浮き出ているその形に、喉が渇いたような感覚に襲われて…♡
私はたまらない気持ちになってしまって、自ら口を開いたんだ…♡
「ご主人様のちんぽを舐めさせてください♡」と言わんばかりの痴態だろう…♡
彼もそう思ってくれたらしくてね、次の瞬間、生ちんぽを見せつけてくれたんだ…♡」
●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
「くすっ…すっごい大きさだろう…♡
一つ前の、中年男優よりも立派なちんぽだ…♡
少女の手首程の太さがある竿には、無数の血管が走っていて…♡
何十人もの女の子宮を犯してきたちんぽの先端は、ぷっくりと膨らんでいて…♡
何より…長いんだ…♡
見せられた瞬間に、膣の奥まで犯されると悟ったよ…♡
あぁそうか…当時の私は、花嫁役に入り込んでいたから、正確にはこうだな…♡
「大好きなあの人よりも気持ち良いセックスをされてしまう…♡」
「ずっと憧れていたこの人のちんぽで、寝取られてしまう…♡」
そう思いながら…私は監督の指示に従い、彼のちんぽを丁寧に舐め始めた…。」
●囁き有声音ゆっくり
「べろん、べろん…れろん、れろぉん…♡」

●囁き無声音
「舌を突き出して、太い竿を隅々まで舐め回して…私の涎を塗りたくって…♡
ちんぽの形や感触を確かめるように、下から上へと舐め上げたりもして…♡
それから、ずっしりとした重量感のある金玉にも、何度もキスをしたな…♡
ちゅぅ、ちゅぅ、と…これから私の子宮に注いでもらう精液に、ご挨拶をしたんだ…♡
くすっ…その時、彼はとても喜んでくれて…私まで嬉しくなってしまったよ♡
お互いの気持ちが通じ合っている…そんな気がしていて…♡

ああ…ほら…♡

私が、少し前のめりになって、彼のでっかいちんぽを丸ごと咥え込んでいくよ…♡
ぐっぽ、ぐっぽ…ぬるぬる、ぶちゅぶちゅ…♡
口の中だけじゃない。喉の奥まで使いながら、彼に奉仕している…♡
だが…♡　予想外のことが起きてしまったんだ…♡
苦しみながらも、私が彼にうっとりとした視線を向けた、その時…♡

…急に、彼の腰がガクガクと震え始めて…♡
私の口の中で、ちんぽが一気に膨張していって…♡
そのまま、何の躊躇いもなく、精液が吐き出されてしまったんだ…♡

どぴゅっ…♡どぴゅっ…♡ぶぴゅっ…♡どっぴゅぅ…♡

彼はずっと悶えていたよ…♡
私の頭を、ぐっと押さえつけながらね…♡
やがて、信じられないほど大量の精液が…私の口の中で一気に溢れ返って…♡
あろうことか、ほとんどの精液を、口から漏らしてしまった…♡
彼のちんぽも、私の口から飛び出して…。
それでも尚、びゅーびゅーと射精を続けていて…♡
せっかくの純白のウエディングドレスは、黄ばんだ精液に塗りつぶされていった…♡
その後も壊れた蛇口のように、精液がまきちらされて…♡
私の顔も、胸も…どろっどろのザーメンに濡らされたんだ…♡
●ここまで囁き
●ニヤニヤ揶揄いモード
「予想外の事態に、現場全体が驚きに包まれたのは言うまでもないよ。
監督は…少し不快感を露わにしながら、彼に何故かと問い詰めた。」

●ニヤニヤ揶揄いモード
「…彼、なんて答えたと思う？」

●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
「花嫁姿の秋元凛ちゃんが可愛すぎて…♡
本当に寝取っている気分になり、堪え切れなかった」

くすくすっ…♡　そう…答えてくれたんだ…♡
正直、嬉しすぎて…その言葉だけで、イキそうになってしまったよ…♡」
●ここまで囁き

●ニヤニヤ揶揄いモード
「その後だが、せっかくなら彼の精液を用いたプレイをしようということになったんだ。
それで、少し準備の時間が設けられてね、
暫くしてから…私の目の前に差し出されたものが、あれだ…♡
あの紙…何だか分かるかな。
きっと、漫画やドラマなんかで見たことがあると思うんだが…。
あぁ、そうだよ…婚姻届、だ…♡
画面に映っている通り、予め彼の名前は記載されていて…印鑑も押されていた。
あとは私が同じようにするだけ…という状況だね。

ほら…時々、ちらりとカメラに視線を送っているだろう…？♡
これは花嫁寝取られAVだから、私は常に、君を含めた視聴者を意識しているんだ…♡
そして、「私はこの方のお嫁さんになります…♡寝取られちゃいます♡」と呟き…。
丁寧に自分の名前を書いて…印鑑を押し…最後に、婚姻届に口付けをする…♡
それから、隣に座っている新しい旦那様に、肩を抱かれてしまうんだ…♡
…くすっ♡　残念だったね♡　…これでもう、私はあの人のお嫁さんだ♡

これから毎日、あの人のもとへ帰って…ご飯を作るんだよ…♡
あの人のためだけに洗濯や掃除といった家事をして…♡
もちろん一緒にお風呂も入るし、寝るまでの時間をいちゃつきながら過ごす…♡
そして夜が深まれば、彼に抱き寄せられて、耳元で「抱かせろ」と囁かれる…♡
それも毎日だ。連日連夜、私は意識を失うまで彼に愛されてしまう…♡
避妊具をしていないちんぽで犯されて、子宮に子種汁をとぷとぷと注がれるんだよ♡
新婚夫婦だからね。飽きずにセックスに夢中になる。だからすぐに孕まされるだろう…♡
頼りなくてセックスが下手な…君を…「元夫」のことを…忘れさせられるんだ…♡」

【●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。】
「くすっ…♡　このシーンはもう少し続くよ♡
新しい夫と契りを結ぶのだから…婚姻届だけでは事足りないだろう…？♡
そう…離婚届も書かなければならない…♡
まあ…通常は離婚届から先に書くべきだが…。
フィクションだから大目に見てほしい…♡

ふふっ…♡
婚姻届と同じように、私の名前を記載していくのだけれど…♡
ほぉら、見てくれ…♡　わざと汚い字で書いているんだ…♡
それも、彼に…新しい夫に…胸を揉まれながら、キスを…されながら…♡
くすっ…♡　涎も垂れてしまっているな…♡
あれでは離婚届がびちゃびちゃになってしまうね…♡

なんとか名前を書き終えた私は…再び印鑑を構える…♡
けれど、机に置かれた朱肉には目も向けず、自分の胸元に印鑑を近づけていって…♡
くすくすっ…♡　あれ、何をしているか分かるかい…？
おっぱいに纏わり付いた、彼の濃厚な精液に、印鑑を浸しているんだよ…♡
私はにやけた表情のまま、精液が乾かぬうちに、離婚届に印鑑を押し当てる…♡
ぬちゅぅ、ぶちゅぅっ…♡　とね…♡
君を馬鹿にするように…精液でハンコを押してしまっているんだよ…♡
それも力強く…♡　しつこく…♡　離婚届に彼の精液を染み込ませていった…♡
これで晴れて、私…秋元凛は、彼だけの女になってしまったんだ♡」
【●ここまで囁き】

●ニヤニヤ揶揄いモード
「くすくすっ…。
私の手元に寄っていたカメラが…部屋全体を映し出して…。
もう一度、豪華な部屋と、窓の外に広がる夏の景色を強調する。
強い陽射しの眩さに包まれる私は、彼の前で膝を折っていき…。
フローリングに直接、正座をしてしまったね…♡

そんな私の左手が、彼に優しく掴まれて…。
薬指にある銀色の指輪が、素早く外されて…。
小さなダイヤモンドが輝く、高級な指輪がすっぽりとハメられていく…♡
それはつまり、あの人との永遠を誓った証拠であって…♡」

●ニヤニヤ揶揄いモード
「私が寝取られてしまったということでもあるんだよ…♡
薬指にはめてもらった指輪を…蕩けた瞳で眺めた私は…♡
両手の指先を揃えてから、その手を床につけ、頭を下げたんだ…♡
最も屈辱的で、淫らな姿…土下座を晒してまで…。
彼にこの身を捧げると、誓っているんだよ♡」

●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
●媚びるように甘ったるい声で
「これから一生、あなたのためだけに生きていきますぅ♡」
「あなただけとセックスをして、あなたの赤ちゃんを孕みますぅ♡」
「ですからどうか♡あなたのちんぽで♡私のおまんこに種付けしてくださぁい♡」
「前の男の精液を上書きして、あなたの優秀な遺伝子で妊娠させてくださぁい♡」
くすくすっ…♡　そうやって、必死におねだりをしたら…♡
彼はすぐに、私をベッドまで運んで…♡　覆い被さってきて――…♡
そのまま、正常位で――ずっぷん…♡　と、挿入されてしまったんだ…♡
肉体的な快感は勿論、それ以上に、幸福感があって…♡
彼と両手を握り合い、見詰め合うことで、その感覚は瞬く間に膨れ上がっていった…♡
ずっとこのまま、この人とセックスをしていたいと、心底願ってしまっていたよ…♡
んっ…あぁ、そうだね、言い忘れていたけど…避妊具はつけていないよ♡
だが、当たり前だろう…？
秋元凛は、あの人のお嫁さんになっちゃったんだから…♡
くすくす…なに焦っているんだい♡
寝取られた気分になって、鬱勃起でもしているのかな…？♡
大丈夫だよ。さっき見たAVでも、生ハメされていたじゃないか。
特にこのAVはドラマ風の演出が多いだけで…。
何にせよ、さっき言った通り、全てはフィクションだ。
くすっ♡　余計な心配をするより、映像に集中してほしいな…♡
ほぉら、彼の優しい腰使いで、犯されてしまっているだろう…♡
ぱんぱん、ぱんぱんぱんっ…♡」

●囁き無声音
「余裕のない童貞君とも、性欲剥き出しで荒々しい中年男優とも違う…♡
愛情の感じられる、ねっとりとした腰の動かし方…♡
他の男から奪った女のおまんこの感触を、ゆっくりと味わうように…♡
ぱん、ぱん、ぱん、ぱんっ…♡
どちゅっ、どちゅっ、どちゅっ、どちゅっ…♡

くすくすっ…♡
あぁ、分かるよ、乱暴にされている時よりも、胸が苦しんだろう…♡
あんな風に、お互いに乳首を触り合ったり…♡
ほっぺを擦り合わせて、二人で微笑み合ったりと…♡
仲睦まじい様子が、本物の夫婦のようで、嫉妬がこみあげてくるんだろう…?♡
私も同じだったよ…♡　身体がとけてしまうくらい…気持ち良くてね…♡
君や視聴者への申し訳なさを意識すればするほど、おまんこの感度が上がっていって…♡
ぱんぱん、ぱんぱんと、奥を突かれる度に…頭がおかしくなっていったんだ…♡」
●ここまで囁き

●ニヤニヤ揶揄いモード
「くすっ…。けれど、絶頂までは辿り着けなかった…。
あぁ…彼がね、わざと腰の動きを緩めたりして、焦らしてきたんだ。
無限に続く、甘ったるい快楽に…全身の血液が熱くなっていって…♡
あと少し先にある、強烈な絶頂が欲しくて欲しくて…私は喘ぎ続けていて…♡
いつしか、彼の身体にぎゅーっと抱き付いて、自ら腰を擦りつけてしまっていた…♡」

●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。
「お互いの肉体を抱き締め合い、ちんぽとおまんこを絡め合う…♡
何もかもが一つになったような感覚に浸りながら…♡
私が…甘えるような声で…「赤ちゃん、ほしいですぅ♡」と囁く…♡
撮影など関係ない…♡

…本当に膣内に射精されたいのだと、伝えたんだ…♡

くすっ…そしたらね、すぐに彼の肉体が強張っていくのを感じたよ…♡
息を荒くしながら…私の太腿を掴んできて…押し返すようにしてきて…♡
そのまま、まんぐり返しの体勢になってしまった私に…♡」

●囁き無声音
「前屈みになった彼が、腰を密着させてきて――どちゅん、と激しく犯してきたんだ…♡
ほら、先程まではとは比べ物にならない勢いで…♡
ばちゅばちゅばちゅ、どちゅどちゅどちゅっ…♡♡
愛を深め合う穏やかなセックスとは違う…孕ませることを目的とした体位…♡
種付けプレスと呼ばれるそれで、オナホのように扱われてしまっているね…♡
だが、何ら問題はないんだ…♡
くどいようだが、私はあの人のお嫁さんだからな♡
彼の肉欲の全てを受け入れるべきオナホであり…♡
大量の種付け汁で受精をさせられる、孕み袋でもあるんだから…♡
…だが、改めてこうして客観的にみると、おぞましい光景だな♡
ああやって、憧れのイケメン男優に種付けプレスで犯されて…♡
牝犬のように叫び散らしながら、ザーメンを注がれるのを待つしかない哀れな姿…♡
時々、全身を押し潰されてしまっている私が漏らす…♡
「おっ♡おぉっ♡おぉんっ♡すきっ♡すきぃっ♡だいすきぃっ♡」
…という、情けない喘ぎ声…♡
それを聞くと、君の心臓も…おかしくなってしまうんだろう…?♡
嫉妬、悔しさ、焦り、独占欲…それらがごちゃまぜになっていって…♡
どくん、どくんと、慌てるように鼓動を刻んでいく…♡
「あぁ、やばい、僕の彼女が寝取られちゃう、イケメンAV男優の女にされちゃう♡」
「やだやだっ…♡嘘だとしても、中出しされるシーンなんて見たくないっ♡」
くすっ…♡
だが、残念だったね。そんな君の願いは届かないんだ…♡
先に謝っておくよ。私は一つ、君に嘘をついてしまった。
例え撮影であっても、本当に中出しされることはないと言ったが…。
この時だけは…疑似中出しではなく、ガチ中出し、だ…♡
ほら――さっきから一度もカットが入っていないだろう…♡
実はパッケージ裏にも書いてあるのだが、ラストシーンはノーカットになっていてね…♡」
そうすることで、中出しの事実を確固たるものとしてファンに伝える意図があるんだ…♡

●囁き無声音
あぁほらっ…♡
もう止まらないよ…本気腰振りの連続だ…♡
ぱんぱんぱんぱん♡どちゅどちゅどちゅどちゅ♡
いくら私が泣き叫んでも、彼の強烈な種付けピストンが続いて…♡
やがて彼も悶え初めて…あぁ、イクッ…♡　イクイク、イってしまうッ…♡
秋元凛に精液が注がれてしまう♡　妊娠させられてしまう♡
イケメンでセックスも上手い彼に…寝取られてしまうよ♡　くすっ♡

腰がびたん、と叩きつけられて…♡
ちんぽの先端が、子宮口にみっちりと密着させられて…♡
あぁいくっ♡　イクイクイクッ♡　もう無理だっ♡　イクッ♡　イっちゃうっ♡
んおっ♡　んぉおっ…♡　おぉっ…♡　おぉっ♡　んぉぉっ…♡
種付けされるっ♡　寝取られるっ…♡　寝取られて♡　彼だけの女にされてしまうっ…♡
いくっ♡　イクイクイクイクッ…♡　イックゥ…♡♡

…どぴゅっ♡どぴゅっ♡どぴゅうぅ〜っ♡
…ぶぴゅっ♡ぶっぴゅぅ…♡ぶびゅーっ…♡

くすっ…くすくすっ…♡
放たれた精液は、一滴残らず、私の子宮にとぷとぷと注ぎ込まれていく…♡
深い絶頂に浸る二人は、それでもまだ抱き締め合い、キスをしていて…♡
最後、彼がゆっくりと腰を持ち上げていくと――…♡

ぐっぽりと開いた私のおまんこの入り口から…♡
ねばねばの、黄ばんだザーメンが、どろぉっ、と溢れ出す…♡
一つ前のAVとは違う、本物の精液だ…♡
子宮に入りきらなかった分が、ああやって、どろどろと零れてしまっているんだよ…♡

それに、一緒にねじこまれた空気も漏れていて…♡
ぶりゅっ、と、おならのような音まで…出てしまっているな…♡
くすくすっ…♡　救いようのない、哀れな牝の姿だ…♡
【●ここまで囁き】

●ニヤニヤ揶揄いモード
「…ふぅ。…これでこのAVも終わりだね。
花嫁姿の私が寝取られてしまうのは、どうだったかな。
やはり…少しきつかったか。君は臆病な男の子だからね。
ん…。あぁもちろん、私の気持ちは、今でも君一筋だ。
あの後、きちんと避妊薬も飲んだしね。
その辺りに関しては安心してくれていい。
私のこの想いが変わることは――絶対にないと、胸を張って言い切れる。

ただ、ね…この撮影以降から、彼から頻繁に連絡がくるようになったんだ。
食事や買い物に付き合ってほしい、という名目ではあるが…。
くすっ…恐らく、下心ありきでのお誘いだろうな…♡」

【●ここから囁き無声音。合間と出だしのブレスもマイクに乗せて。】
…こんな私を大切に思ってくれるのは、君一人だけなんだ。
だからこれからも、私を守ってほしい。
約束、だからな…？くすくすっ…。」
●ここまで囁き